



講演 2 日本の伝統文化から 地球環境問題の未来を考える

こころの未来研究センター教授 カール・ベッカー



おはようございます。京都大学のカール・ベッカーと申します。私が35年ほど前に京都大学の大学院に入りましたときに、いろんなきっかけで九州に来ることが多かったものですから、九州は大変懐かしく、また恋しい場所でもあります。このような形でこの場で講演させていただくことを大変嬉しく思います。先ほど寶先生が震災や洪水など、激変を伴う災害について語られましたが、ひょっとすると人類にとってさらに危険なのは、突如として生起するようなものではなく、徐々に変わっていく環境や人類のあり方かもしれません。単に科学技術によって強固な橋を架けるとか、よりよい予知システムをつくるとかいうだけではなく、我々の生き方そのものが問われることになります。

こころ未来研究センターは、人の心理や倫理を中心に研究している研究機関です。いくら新しい技術を工夫したところで、人間がそれをうまく使おうという心を持たなければ、技術自体はうまく働きません。

まず、日本の伝統について少し考えたいと思うのですが、伝統社会においては、人間はだいたい10歳ぐらいまで親に依存して、10歳前後から農業や漁業、家庭で行っている作業などに携わっていました。その当時の平均寿命が50歳でしたので、寿命のわずか1~2年前になってやっと、職業が農業であれば農業をやめたのです。つまり、労働年齢が例えば10歳から48歳であれば38年間労働していることから、依存期間は（生まれてからの）10年プラス（死ぬまでの）2年であり、38年の労働力に対して12年しか依存していません。それが明治、大正、昭和まで続き、やがて日本人の平均寿命が68ぐらいになったときに、現行の60歳前後の定年退職年齢が定まったのです。そこでも、だいたい18歳から60歳あるいは62歳まで勤めて、40数年の労働によって、（生まれてからの）18年プラス（死ぬまでの）8年、すなわち約26年の依存期間を支えていたのです。ところが、現在でも60歳前後で退職しますが、平均24歳からしか勤め始めません。24歳まで依存して、そして60歳から85歳まで依存するわけです。合計50年近くもの依存期間をわずか36年の労働によって支えようとするのです。

別の表で見ますと、伝統文化においては、生れてからのわずかの依存期間の面積と、退職してから死ぬまでのわずかの依存期間の面積が、この大きな生産余剰によって支えられていたのです。面積を計算しますと、現在ですとこれだけの面積の差が見られます。特に末期になりますと、

医療費などがぐんと上がりますので、この面積は広がります。この2つの面積をこのわずかの余剰によって支えようと思っても、どう考えても採算が合いません。厚労省などの中で、人手不足や少子化を根拠に、もっと子どもをつくらなければいけないという者がいますが、現状では人口が増えれば増えるほど困ります。この形態自体を変えていかないと、人口だけを増やせばそれだけ依存、つまり借金がたまるのです。この形態をどう変えるかということが、人類が抱えている大きな課題の一つでもあります。子どもが不足していると思いきや、日本の人口は1億3000万ぐらいで安定しています。子どもをつくらなくても安定しているのは、ご年配が長命になったからです。ご年配が元気で頑張ってくれば、それは申し分ありませんが、ご年配が居残っているにもかかわらず、子どもをつくってしまえば、人口爆発の原因となります。したがって、ただ単に子どもをつくれればよいという時代ではなくなっています。

実は、日本は江戸時代の1630年頃から明治維新までの240年間、3000万人ぐらいの人口で安定しています。明治維新が終わった時点で西洋の国を真似して外地をつくり、植民地をつくり、軍事力でもって人口を外に送りました。その結果、台湾、朝鮮半島、樺太、やがて満州などを領土化しましたので、1920年頃の日本の人口は、満州、樺太などを含む人口です。そして、戦争が終わった時点で日本は日本列島で支え切れない人口を、減らすのか、それとも輸出するのかという大きな課題に直面しました。人類がこれまでやった試みのないことに、日本は労働や頭脳を使って挑戦したのです。

まず資源を輸入し、それにプラスアルファの価値を付加して輸出しようと試みました。その結果、人口は20年前に現在の1億3000万人に近づき、いまだにその人口を維持していますが、それを支える輸出自体が変わりつつあります。人類史上、類のない人口密度の国を日本は築き上げたのです。

仕事不足だと言われていますが、日本のような国は他に存在しません。現在、400万人の仕事が不足している。ところが、看護、介護、農業、林業、さらに産業などでは人手不足で、日本人は毎日のようにインドネシア、中国、パキスタンなどから労働者を受け入れようとしています。この現状において、400万人もの日本の若者が職に就いていません。フリーター、ニートなどは、人手を必要とする産業、農業、介護などには就いていないのです。一方で400万人に職を与えないでいて、外国からの労働者を受け入れようとする自体、非常におかしな話です。それについて、我々も考えないといけません。現に、北欧などを例にとれば、彼らも一時労働力不足を経験し、トルコやアルジェリアなどから労働者を入れて、後で大変困ったことになりましたので、それらも参考にできます。

日本が輸入に頼り切っていることは、もう申すまでもないことです。福岡県の港などは重要な例になります。自給自足の率がどんどんと様々な領域で減っています。全体のカロリー数から考えれば、現在日本人が食べている食物の3分の1さえ、国内で生産できていません。ゆっくり見る時間がないのですが、例えば穀物を見れば、50年ほど前には日本で7割近くの穀物が生産

できていたのに、現在では2割ほどしか生産できていません。また魚介類などを見れば、私が初来日したときは、日本は主要な輸出国でさえあったのに、現在ではその当時の4割しか漁獲できていません。食用油脂なども、現在では1割も生産できていません。ファーストフードで揚げ物などがどんどん増えていますが、そのほとんどが海外から輸入しているものです。

食物だけでなくエネルギーも同様に、日本がエネルギーを自給自足できたのは、石炭を使っていた時代でした。この近くにもいっぱい炭鉱がありましたけれども、石炭を使わなくなった途端に、どんどん海外のエネルギーに頼らざるを得ないような状況になりました。エネルギーの生産は徐々に増加しています。新潟の油田、ソーラー、水力など様々な国内の生産がありますが、使用するエネルギーの量が大きく増えているのです。車、冷暖房機、さらにエレベーターなどを使うことによって、生活費はぐんと上がります。これまでにない家電を使うようになったのです。それ自体が悪いと言っているわけではないので、誤解のないようにお願い致します。ご理解いただきたいのは、我々がエネルギーに頼る生活を送る以上、エネルギー資源の問題を考えなければならず、そのエネルギーを国内でつukれない場合、それを獲得するための工夫が必要になるということです。

エネルギーの消費量を考えると、アメリカは比べものになりませんが、この表の青や灰色の英国、フランス、ドイツなどより、日本ははるかに多くの石油、石炭を使用しています。これは5年前の図ですが、近年でも日本は石炭を使い、世界の非難を受けています。石炭を使う時代はなくなっているのですが、さらに核も積極的に使おうという試みが見られます。つまり、日本のエネルギー依存率は他国に比べてはるかに高いということです。

1900年頃まで地球の石油タンクは満タンでした。だれも石油を使っていなかったのです。ところが、近年ではグラフのカーブの曲線は下がっていますが、第二次世界大戦まで戦争の目的以外では石油は使われていませんでした。戦後、各家庭で車、トラクターなど石油を必要とするものを買うようになりましたし、近年では中国、インド、アフリカなどの後進国も車やトラクターなどを希求することによってグラフの曲線は急落しています。世界のガス欠、すなわち、ガソリンがなくなる時代を意味します。ところが、石油に頼らなければ、穀物に未来はないと言っても過言ではありません。その中で、最も石油を必要としているのは、トラクターや化学肥料なのです。化学肥料がない、あるいはトラクターが動かないとなると、日本の農業はどうなるでしょうか。一人ひとりが鍬を持って農業をできるでしょうか。もしかすると、石油に代わる天然ガスなどの豊富な資源があるかもしれませんが、ソーラーだけではこれだけのものを動かすことはできません。たとえ天然ガスが代替エネルギーとして存在したとしても、日本は低価格で十分な供給を期待できとは思われません。これが非常に深刻な問題になっていきます。

また、排気ガスや温暖化などの悪影響もあり、単に石油が残ればいいという話ではありません。石油を使うことによって2度ほど温度が上がると、まず害虫や細菌が急増し、米などの食物が害虫や細菌などにやられてしまいます。それに対して、殺虫剤を使うのは悪循環で、殺虫剤を使え

ば使うほど土壌が汚染され、最終的に使えなくなります。また、収穫できる食料もどんどん減っていきます。気温が上がれば、人間の病気も 1.7 倍ほどに増え、さらに犯罪も増えます。

福岡でも京都でも冬になると、数日は零下まで下がるがありますが、零下まで下がる、寒い時期こそが我々を救う時期なのです。まず病気に關してですが、零下になることによって、越冬できない虫や、その虫の卵などがいっぱいあります。一度も零下にならない場合、マラリア、コレラ、ペストなどを運ぶばい菌が虫によって運ばれ、日本でも越冬できるようになります。最近まで、様々な薬でコレラやマラリアなどによる感染症を防いできましたが、薬の効かないスーパーばい菌などの細菌も海外で増えています。薬だけでは対応できない時代になってきているのです。

次に犯罪に關してですが、福岡や京都などでも、毎晩 25 度～30 度を超えるような熱帯夜が増えています。人間は寝られなくなり、そして昼は 35 度を超える状況になると、一万人に二、三人は気が狂います。その意味で、犯罪行為が増えているのです。ニューヨーク警察でも東京の警察でも、熱帯夜が続くと犯罪が多発しますので、温度計を見ながら恐れています。熱帯夜になれているスペイン、インド、さらに南米であれば、昼の 1 時から 3 時まで一切動かず昼寝をするシエスタをとっています。そういう慣習によって犯罪行為は避けられますが、働きバチの我々が気温を無視してとにかく頑張ろうとなると、何割かの人は気が狂ってしまい犯罪を犯してしまいます。これも大きな問題です。

したがって、たとえ石油、石炭、天然ガスが残ったとしても、それを好き放題燃やしてしまえばよいという時代ではなく、CO₂を増やせば前述の結果になるという時代なのです。すべてのエネルギー、すなわち、熱も CO₂も空気循環に吸収されて、環境や気象に悪影響を与えています。

近年、エネルギーの輸入はどんどん増えております。かつて北九州でも鉄も石炭も掘り出せましたし、家電も少なかつただけに、日本の成長期までは、国内のエネルギーが足りていました。しかし今となっては、家電、腕時計、カメラやレンズ、化学肥料といった、日本を支えてきたほとんどすべての物が生産できない、輸出できない、もしくは中国などに負けてしまうという時代になりました。日本の輸出高は大成長期をピークとして、どんどん下がり、2010 年の数字はできていませんが、ほとんどゼロです。つまり、どこの店へ行っても「メイド・イン・チャイナ」ばかりで、たとえ日本の製品を買ったつもりでも、実はマレーシアなどの外国産であったということが起ってきます。

一方で、日本の国内消費支出は毎年上がっています。これは医療費も同様で、高齢化とともにどんどん上がっています。それを保険でそれをカバーしようとすると、国の赤字、すなわち、公債残高、借金になります。小泉総理は着任演説において、2000 年を目途にこれ以上借金を増やさないと約束しました。しかし、借金は毎年 40 兆円近く増加し、次の政権が例年にない借金を背負ってしまうことになります。結果的に、国民 1 人当たりの公債、借金が現時点で 1600 万円ぐらいに上がっています。これは赤ちゃんやご年配も含めて、平均家庭において 5000 万円ぐらいの借金を抱えていることを意味します。アメリカ人も同じではないかという方も

おられるでしょう。確かに、アメリカ人も同じような数字を叩き出していますが、大きな違いが1つあります。アメリカには莫大な量の金、銀、銅、鉄、石油、石炭、ウラン、重金属などの資源が眠っているのです。したがって、アメリカに対して、中国が借金を払い返してくれと言われた場合、「ちょっと待って、今掘りますから」ということが言えるのです。つまり、資源を発掘して売却しさえすれば、払い返すだけの経済的基盤があります。しかしながら、日本で掘れば出てくるのは温泉ぐらいですし、輸出できるものではありません。日本にとって、アメリカは真似をするような良い例ではないのです。

ところで、CO₂による温暖化と市民生活の破壊は前述したとおりですが、山陰、北陸辺りでは中国が原因の酸性雨の影響もありますので、砂漠化などをどう避けるかという点も問題になっています。

以上、簡単に問題の背景を描きましたが、次に近未来について考えていきましょう。日本に限らず全世界が抱えている共通のニーズとして、いくつか挙げることができます。その一つが、エネルギーです。持続可能なエネルギーとしては、太陽光発電、(九州などの)地熱発電、風力発電、海の温度差を利用した発電などが挙げられます。次に、有機農法です。農業において永久に殺虫剤と化学肥料が使えるわけではないので有機農法が必要になり、その繊維を賢く利用することも求められます。さらに、飲料水です。飲料水の問題も日本だけではなく、全世界的な問題であります。身近な例ですが、福岡や松山では夏になると頻繁に断水を経験されるでしょう。

持続可能なものとしては、例えばバイオマス、風力発電、地熱発電、ソーラー発電、海温度差、などの新しい資源が考えられます。数週間前まで、私もバンクーバーのオリンピックで熱心に日本を応援していましたが、日本がオリンピックでメダルを獲得するかどうかは、ある意味において日本の将来にとってはどうでもいいことです。もちろん、私たちは日本が勝つのを望みますが、たとえ負けたところで、何の損もしません。オリンピックは単なるゲームの競争ですが、本格的に日本の将来を決定する競争は、エネルギー開発の競争です。バイオマスで世界のエネルギー需要を満たせる国になれば、その国が当面成長する国となります。残念ながら、日本は上位5位に入りません。もし、風力発電に関する技術が全世界に提供できるとなれば、それは当面、その国を支える産業になります。ところが、1位はデンマーク、2位はドイツ、3位はオランダ、そして日本は5位に入っています。大学の数、企業の数、頭脳の質などを考えれば、日本がデンマークに負けるはずがありませんが、現実的にデンマークに負けています。したがって、日本の優先順位として、オリンピックよりもエネルギー供給の問題にさらなる投資をしなければ、日本に未来はありません。因みに、地熱発電の部門において、1位はアイスランド、その次にフィリピン、インドネシア、中国、イタリアと続き、日本は5位を競い合っています。

先ほど寶先生の話にも出てきましたが、この火山列島は、少し地中を掘り進めばマグマに達して、その熱を半永久的に使うことができます。したがって、その技術を日本が世界に売り込み、著作権料や特許料などを獲得すれば、日本の未来を支えるだけでなく、世界中が喜んで日本の技

術を買ってくれることでしょう。しかし残念ながら、日本はその競争に対してあまり積極的ではありません。

ソーラータクシーを初めとするソーラー技術の部門では、日本はぎりぎり4位ぐらいに入ります。上位にはシーメンスのドイツ、アメリカ、中国、オーストラリアなどが入っています。日本がこの部門にもう少し力を注げば、第2成長期は可能であると思います。日本は決して能力がないとか、技術がないからではなく、技術開発をしようとする意欲がないのです。政府が重い腰を上げるのをただ待っていても、いつまでたっても動かないでしょう。研究者の側で「これが世界のニーズに応え得る。近未来にとって必要である」と考え、実際に行動に移していければ日本はまだ勝てると思います。期待しています。

高校の教科書にも載っているようなことですので、繰り返すまでもないとは思いますが、すべての廃棄物は水の循環に入ってぐるぐる回っています。その理屈で考えると、店先に並んでいるすべての洋服、ラック、家電などは、すべて自分の孫たちが食すことになります。この事実をどれだけ認識しているのでしょうか。50年たてば、今着ている衣類、ラック、家電などは廃棄物になり、それがじわじわと水に入っていきます。その水が食物連鎖に入って、最終的に野菜や食物などを通して孫の体に入ります。この認識に基づけば、生産するだけでなく、廃棄することについても考えなければいけません。つまり、消費者や国際社会は、物はどこから生じるのかという問いを立てる必要があります。近い所から入手し、長もちでリサイクルするもの、持続可能や再生可能であればあるほど、環境への負担は軽く、そして体に優しいのです。

実は、江戸時代と同時代において、日本だけが外国に依存することなしに、複数の100万人都市を維持していました。世界史を概観すれば、100万人都市を持っていた国は、まずローマを挙げることができます。また、千数百年後ですが、エリザベス朝のロンドン、ナポレオン時代のパリ、19世紀末のニューヨークなども挙げられます。しかし、これらいずれの100万人都市も、軍事力によって外国に植民地をつくり、そこから穀物を輸入することによってやっとその都市を存立させていました。世界の中で唯一の例外は、京都、堺、長州、江戸などです。これらの都市では、100万人が平和に、軍事や外地に頼らず、リサイクルを徹底しながら生活を営んでいたのです。その意味で、日本は全世界に対しての前例となりうる国だと言えます。

廃棄物に関しては、どういう目的で物を購入するのかということについても考えなければなりません。食物の購入に際して、健康志向であれば多量の添加物などいりませんし、化学薬品なども、体をきれいにすることが目的であれば、有害な薬品を購入することはありません。真に健康を目的に物を購入するのであれば、有機でポストハーベットの少ない物を選びたいのです。例えば、中国産、メキシコ産のブロッコリーは80円で、他方、佐賀産のブロッコリーは100円だとすれば、どちらを買うでしょうか。価格だけを比較して、中国産やメキシコ産のブロッコリーを買うと言う者もいるでしょう。しかし、ここで少し考えていただきたいのです。佐賀産のブロッコリーは「食物」ですが、メキシコ産や中国産の方は「食物」としての価値はありません。その証拠に、

1 か月間、その食物を置いておきますと、佐賀産の方は花を咲かせてしおれてしまいます。つまり、佐賀産のブロッコリーは生きているのです。逆に、中国産やメキシコ産のブロッコリーは、1 か月間置いておいてもそのままです。例えて言えば、中国産やメキシコ産のブロッコリーはプラスチックです。したがって、食物を買う場合、「食物」を買いましょう。「食物」の形をした外国産の食物は、「食物に値しない」と考えた方が良いでしょう。私はがん患者の看取りを傍らでしてきましたが、がん患者の看取りは大変痛ましい様子です。皆さんにはそのようにはなってほしくありません。ところでどうしてみんながんになるかと言えば、添加物ばかり食べているからです。なるべく自然で添加物の無い食物を選びましょう。

続いて、廃棄物はどこへ行くのか、再利用は可能か、再生は可能か、自然分解は可能か、副産物が出ないか、有毒物質は出ないか、などということも併せて考えなければなりません。このようなことを考えると、環境にとって負荷が軽く、人体に優しい物を最初に発売したところが最終的に生き残ると考えられます。

私は日本の知恵が地球を救うことを期待して来日しているのです。今でもそれを信じてやみません。それでは、どのような叡智が必要なのか。端的に言えば、「足るを知る」ということです。私はハワイで育ちましたし、皆さんは日本で育ったことと思います。我々の共通点は何かということ、「島」であるということです。つまり、大したもの了他所から輸入できませんし、輸出もできません。過去に鎖国を経験している島国、ハワイや日本のように、地球もある意味では閉鎖された「島」といえます。微々たる太陽光しか取り入れることができずに、人間の出す廃棄物を宇宙に放出することはできません。結局のところ、循環的に生きるしかないということですが、ハワイや日本といった島国は既にそれを知っています。「島」でない国々はこのことを未だによく理解しておりません。

したがって、循環的社会を江戸時代の鎖国で成立させていた日本の歴史から、発想や技術を学ばない理由はありません。この江戸時代の屏風絵を見ても分かりますように、すべての部屋に複数の人がいて、色々な作業や商売を営んでいます。それ以外にも、人が道を歩いています。昔の長州でも京都でも、このような混み具合です。しかし、これは不都合のある生活様式ではなく、ごく普通の生活様式として認識されていたのです。みんな夜になって家に帰ると、営業していた部屋を寝室として使い、布団を敷き、同じ部屋を別の形で利用しています。これが日本人の知恵の1つです。

17世紀、日本は既に持続可能な人口の限界に達し、自給自足の循環型制度を完成していました。戦争も犯罪も皆無で、平和で自治可能な社会を築き上げ、高度な文明を発展させていたのです。現在、全世界が同じような課題を抱えています。江戸時代の日本から学ばない理由はありませんので、江戸時代の経験知の根源として、持続可能な生活様式と持続可能な世界観を少し考えてみたいと思います。

まず、持続可能な生活様式ですが、食物やエネルギーは完璧な自給自足でした。京都であれば、

食物を歩いて1日、2日かかる近江や北陸、日本海から運んでいました。それを京都で食べて、残飯、魚の骨、さらに自分の人糞までも、近江や日本海側まで再び運んでいたのです。長州もそうであったと思います。このように、資源と廃棄物の完全なリサイクルは成立していました。江戸時代、徳川の条例によって、各家庭において所持できる着物が身分によって決まっていました。例えば、ある家庭は1人当たり1着の絹の着物、2着の綿の着物、そして3着の麻の着物しか所持が許されていませんでした。したがって、ほどこいては洗って縫い直すという作業を繰り返し、とうとう使いものにならなくなったときに、座布団のカバーにしたのです。そこで初めて、新しいものを使うことが許されました。

日本人が家庭計画として行っていた人口制限には間引きがあります。これは痛ましいです。裏を返せば、自分の子どもを殺さなければいけないほど、日本人は持続可能な人口の限界に達していたのです。同僚の落合恵美子先生が論じているように、江戸時代には宗門改帳という寺が収集する記録がありました。それを見れば、五穀、すなわち穀物の価格が上がるのと比例して間引きの比率が上がっているのが分かります。逆に、五穀の価格が安定すると、間引き率は徐々に下がっています。つまり、これ以上人口を支えきれないと分かった場合に、子どもの数を制限していたのです。そこで、ゼロ成長経済を支える価値観を必要としていたのです。人口制限に関して、これはこけしですが、こけしの語源は、自分の子が消されたから、子が消されたかわりにこれを慰みとして抱きなさいと渡されたもので、間引きが多かった東北地方ではこのような慣習が根付いています。

江戸時代の衣類に関してですが、麻と絹を中心に個人差のない和服が作られていました。すべて同じサイズで、すべて買い換え可能な物として作っていたのです。食に関しては、魚介類、大豆タンパク、海藻、季節の野菜、果実などが主に食されていました。また、徳川の条例によって、身分によって何年前の古米を食べるとか、古米に何割のキビやアワなどをまぜるかといった事柄が全部法で定められていました。きょうは白米が食べたいから食べるとか、きょうは何が食べたいから食べるという時代ではなかったのです。住に関しては、地元の材料で省エネの住宅を建てるということが行われていました。つまり、夏は風を通し、冬は火鉢や、障子の断熱効果で生活していたのです。大した資源を使わずに、火鉢のちょっとした炭で何とか日本の冬を越せます。そして、資源と廃棄物の完全な再利用は、先述したように、できました。すべての廃棄物は、有機で畑の肥料に戻しました。風呂の湯を洗濯に利用し、その水を食物の水洗い、水やりなどに利用するといった具合に、何度も同じ水を利用していたのです。木材や和紙、金属はすべて再利用しておりましたし、着物も再三ほどこき、洗い、縫い直し、布団にまで使っていました。釈迦に説法ですみませんが、このような話は海外でも致しますので、お許しいただきたいのです。

徳川の条例によるゼロ成長経済は、詳細な禁止事項を立てていました。先に少し触れましたが、身分によって何着の絹、木綿あるいは麻の着物を持ってよいか、何割のアワ、キビを何年の古米にまぜてよいか定められていました。もちろん肉食は禁止です。肉を生産するのに広大な土

地や水が必要となりますので、その分のエネルギーを大豆から採ったほうが効率的だということです。また、何畳の何部屋の家に住み、何棹のたんす、家具を所持するのか、枕の材料までもが法で制限されていました。さらに、お参り以外の旅行やお祭り以外の飲酒は一切禁止です。現在、皆さんがご覧になる時代劇は誤っており、気軽に旅行に行ったり、酒を飲んだりすることは、実際は禁じられていたのです。そのために関所もあちらこちらにありました。

ところが、江戸時代において日本人はこれだけ厳しい生活を営んでいたにもかかわらず、美術、華道、茶道、武道、園芸などは世界的に見ても傑出しています。はたして、どのような世界観がこれを可能にしたのでしょうか。当時の個々人がより大きな視野の中で自我を押さえつけたと言えるのではないかと思います。例えば藩、家、組、講、地域、職業に帰属することによって、「いる」ことより「する」ことに誇りを持っていたのです。日本人は単に生活の糧を得るために働いていたわけではなく、自分の職業に誇りを持ち、完璧なものをつくるという精神があったのです。その精神こそが現在の車産業時代にも受け継がれており、全世界の日本に対する評判につながっているのです。それだからこそ、最近、プリウスに欠陥があるのが判明し、全世界が驚きを示しているのです。日本人だけはこのようなミスを犯さないと信じていたのです。また、その当時の人間の価値は、偏差値などではもちろんなく、晩年になっても誇れる道、人格、品格にこそあったのです。全世界でお茶を飲みますが、お茶の瞬間を記憶に刻む技術を磨いたのは日本人だけです。二度と忘れまいという茶道、茶室などは素晴らしい日本文化の一つで、それに類似した武道などもあります。また、日常的な祈りや先祖の知恵との交流が日本人の知恵の一つだと言えます。社会と自然の相互作用を意識しながら、自然の恵み、先祖の知恵、社会やすべての人に感謝し、資源と自然を壊さない程度に煩惱を自制して、知恵と慈悲を尊重してきたのです。先祖とのつながりに関しては、先代が守ってくれた資源を自分でも護る。この護るというのは、自分を守るのではなく、他者を護る。つまり、保護としての護りです。過去の知恵を聞き、生かし、未来の世代のために自粛し、持続不可能な借金や約束はしない。心の中で、先祖と自分の仏壇やお墓などで交流し、あれをくれ、これをくれと言うのではなく、自分の親や先祖を思い出し、その知恵を頼る。自分で自分をつくったわけではないことを理解しながら、自分の先祖のためにも良い環境を残さなければというのが日本人の当たり前の知恵だったと思います。

近年、欧米では医学的な見地から、「唱える」ことにストレスの予防効果があることが証明されています。私は特定の宗派を宣伝しているわけではありません。日本人の伝統的な知恵は日本以外でも広く認められて見直されているが、日本人がそれに目を向けていないということを主張したいのです。

続いて、相対主義に関してですが、日本では排他的な宗教戦争は6世紀に終わっています。物部守屋と蘇我馬子の神仏戦争が悲惨なかたちで終わり、両者は冷戦状態にあった。その後、行基菩薩があらわれ、神と仏は同じもので、神は仏の化身であるという教えを説いたのです。これを期に、両部神道や権現説が出現し、その結果、千数百年も前から日本人は宗教に関して絶

対はないということを相互に認識してきたのです。アメリカのブッシュ2世大統領は、自分たちが唯一正しい信念を持っていると考え、世界中に対して敵か味方か、白か黒かと言っています。敵味方や白黒などの二分法は、対立や紛争を促す、時代遅れの発想です。むりやり世界を敵と味方に見分けてしまうよりは、すべての人は関係性の中で共に生活していると考えた方が平和な未来に繋がることでしょう。日本は世界に、相対的な智慧をもっと伝えなければいけないと思います。

徳川時代になると、剣術よりは学問が重視されます。武士はもちろん剣術を磨きたかったのでしょうが、「剣より筆」と、幕府の指導下で武士は文人・知識人になり変わり、筆や美術に誇りを覚えるようになりました。つまり、社会を持続可能にした日本独自の知恵とは、横軸、すなわち社会の軸ですが、自己中心的な考え方よりは、みんなのためといった自他同一的な社会意識です。縦軸ですが、先祖と子孫を視野に入れて交流し、「今」中心というよりは「過去」に感謝し、未来のために働くことが重んじられていたということです。価値は金銭や偏差値というよりは人格や職人芸に、ルックスや体力というよりは精神力、品格にあった。そのような人格、職人芸、精神力、品格などを尊重する文化であったと思うのです。このような価値観がないと、ゼロ成長は成立しません。また、世界の現状を考えると、このままの資本主義ではうまくいかないでしょう。もちろん完璧な文明などはありません。「江戸時代に戻れ!」というわけでは決してありませんが、日本の歴史から多くのヒントを得ることができるのではないかと考えています。地理的に日本列島は残ったとしても、日本の価値観や文化は地球を救う遺産であり、これらが消えてしまえば、もったいないと思うのです。つまり、手遅れにならないうちに、持続可能な生き方を実践し、世界に発信していこうではないかというのが、本日のこころの未来研究センターからのメッセージであります。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)